

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成 27年4月28日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 防災研究所

職 名・学 年 特定助教

氏 名 清 水 美 香

助 成 の 種 類	平成26年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 研究成果物刊行助成			
研 究 成 果 物 名	協働知創造のレジリエンス:隙間をデザイン			
著者・編著、作成者全員の所属・職 ・ 氏 名	防災研究所特定助教 清水 美香			
学術書・論文集等について	出版社・印刷会社等名	発行年月日	配 布 先	
	京都大学学術出版会	2015年3月31日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出(ご提示)下さい。			
会 計 報 告	事業に要した経費総額	2,643,084 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 京都大学学術出版会の売り上げ		
	経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て			
		費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
		組版代	999,000	500,000
		製版代	473,200	200,000
		刷版代	205,200	100,000
		印刷代	344,000	100,000
		用紙代	229,600	
	製本代	400,000	100,000	
	消費税	212,080		
	合 計	2,863,080	1,000,000	
当財団の助成について	出版助成を頂き、執筆に専念できスムーズに出版作業を進めることができました。感謝です。			

2011年3月東日本大震災以降、「レジリエンス」、またはその訳語が日本でも幅広く使われるようになった。この言葉は、個人、コミュニティ、社会、経済、政治の様々な場面で日常的に見聞きされる。しかし、レジリエンスは本質的に何を意味するのだろうか？ 今日その言葉に内在する本質は未だほとんど熟知されていないままで、やはり言葉に終始しがちである。世界に目を向けてみても、あらゆる政府機関や、国際機関、様々な分野の学者、さらにメディアも企業も、レジリエンスという言葉を経験した様々な場面で用いる傾向にある。しかも、そこにはレジリエンスを深く読み取っているものもあれば、そうでないものもあり玉石混交の状況が見られる。そうであるがゆえに、誤解も多くなされやすい。

本書は、上記の現状を踏まえながら多面的な視点からレジリエンスの本質を見据え、私達が直面する現代リスク社会を取り巻くダイナミックな環境変化にどう対応し、問題解決方向に向けた社会イノベーションにどのように繋げていくのか、その問いの羅針盤となる可能性に繋がれるものとしてレジリエンスに注目し、その点が本書でレジリエンスと向き合う原点となっている。よくレジリエンスの訳語として使われる「回復力」または「強靱、しなやか」といった「状態表現」の域に留まらず、より深くレジリエンスを捉え、学問枠を超えてレジリエンスに関わる主な考え方、アプローチから引き出されるものを集約して、そこから絞り出されるエッセンスを抽出し、それを体系的に組み立てることによって、様々なケースに応用できるレジリエンスの根幹になるものを提供している。特に、レジリエンスを「環境変化を重視し、それに関わる問題解決に向けて様々な「隙間」を発見し、その隙間を小さくするために社会に散在する点を線で結び、木を見て森も見ながら、予測しないことが起きても、逆境にあっても折れない仕組み、社会を協働で創ること」とし、そのレジリエンスに内包する要素として、(1)「点」から「線」へ、(2)「木を見て森も見る」、(3)「システム× デザイン× マネジメント思考」、(4)「継続的学習× 評価× 一貫性」、(5)「適応、イノベーション」、(6)「繋がり」(リンクエッジ) × 「プロセス」に注目している。

思考面に留まらず、さらに、実際に社会やコミュニティの中の仕組み創りや、または問題解決志向のプログラムに、レジリエンスから引き出されるアプローチを適用することを重視している。レジリエンスを完璧に具体化したモデルは既存のプログラムにはほとんどないが、そのレジリエンスの根幹に触れるような実際の取り組みや、そこに関わる可能性や課題を注視している。東日本大震災が起きた東北の被災地とハリケーン“Sandy”を経験したアメリカのニューヨーク市については、特別にスポットライトを当てている。こうしたことを踏まえて、散在する経験・知識・システムの俯瞰をベースにして、知と知、人と人、システムとシステムを繋げながら協働知を共に創り上げていくプロセスを通して引き出されるレジリエンス、「協働知創造のレジリエンス」を提案している。

上記を中心として本書は以下のように構成される。

まずI部「「レジリエンス」を紐解き、創る」では個人の身近な例を使いながら、「気づき」や、

そこから一步踏み込んだ「キーワード」を通してレジリエンスに内包される深い意味を解き明かしている。それを踏まえてレジリエンスの基軸を提示し、マトリックスを用いてレジリエンスに関わる包括的視点を分かりやすく解説している（1章「点から線へ」）。また、レジリエンスの重要性と大きく関わる現代リスク社会のダイナミックな環境変化について、2章で詳しく述べている（2章「現代リスク社会」）。さらに3章では、世界ではこのレジリエンスがどのようにプログラム化されてきたのか事例を通して解説される。そうした事例を通してグローバルに見られるレジリエンスの動きの「萌芽」と「隙間」を明らかにしている（3章「萌芽と隙間」）。

II部「境界線」では、レジリエンスと復興に焦点を当てて、東北（4章「東北における協働知の創造レジリエンス」）とニューヨーク市（5章「ニューヨークにおける協働知の創造レジリエンス」）のケースを通して、それに関わる政策やコミュニティの活動がレジリエンスにどのように関わっているのか、I部で提示したレジリエンスの基軸やマトリックスがどのように適用されるのかを検証している。その中で、木と木の間、特に様々な多様な主体やシステム間の「境界線」に注目し、その境界線にレジリエンスの要素がどのように絡んでいるのか、どこに「隙間」があるのか、その在り方がどのように問題解決志向のアプローチに関係しているかを明らかにしている。

III部「木を見て森も見て」では、協働知創造を通してレジリエンスをどのように描くのか、どのような仕組みが関わるのかを中心にみながら、デザインの素材になるツールが示される。また現代リスク社会を中心に置いた場合の社会または政策デザインの基軸を提示する（6章「協働知レジリエンスのデザイン」）。またI部、II部で引き出したレジリエンスの要素、さらにこの6章のツールや視点を使いながら、東日本大震災の教訓を明らかにしている（7章「東日本大震災の教訓から」）。さらに、政策システムとレジリエンスがどのように関わっているのかに焦点を当て、日本の現状における「隙間」を踏まえて、「協働知創造のレジリエンスのための政策システム」を提示する（8章「政策システムとレジリエンス」）。最後に「結びにかえて」では各章で積み重ねたものを踏まえて、「協働知創造のレジリエンスに向けて」、政策提言と日本のリーダーへの提言を行っている。